

救護第13班 4月1日～4月8日 看護師・三池 裕美子



鳴瀬庁舎の救護所は1日に50人前後の受診があり、慢性期の患者や皮膚疾患、粉塵による疾患が多かった時期でした。周辺はテレビに映った映像どおりの光景で、復興・復旧ができるのか、予測のつかない状態でした。



被災地の皆さんは震災後の片付けに追われていて疲労してらっしゃいました。手が冷たかったのが印象に残っています。自宅に帰っても津波の湿気が残っていて、ひんやりしていたそうです。

救護班のスタッフにも粉塵の影響などで体調不良を訴える人が出てきました。前後の救護班と派遣期間が重複するようになってきていましたので、交代でテントの片付けやデータ整理など石巻赤十字病院の本部での作業に当たりました。休むなんてとても。災害派遣で来てみんな頑張っていたのですから。

地震は1日に何回もありましたが、私たちが帰る前の夜、宿舎にいる時大きな地震がありました。停電して非常灯の中で身支度して石巻赤十字病院へ向かいました。普段は高速を通って30分くらいなんですが、高速を使わず、一般道路も初めて通るし道路の安全も不明、用心しながら進みました。20分くらいして石巻赤十字病院のテント班から応援の必要はないと連絡があり、宿舎に引き返しましたが、一時は、熊本に帰れないかもしれないと覚悟しました。